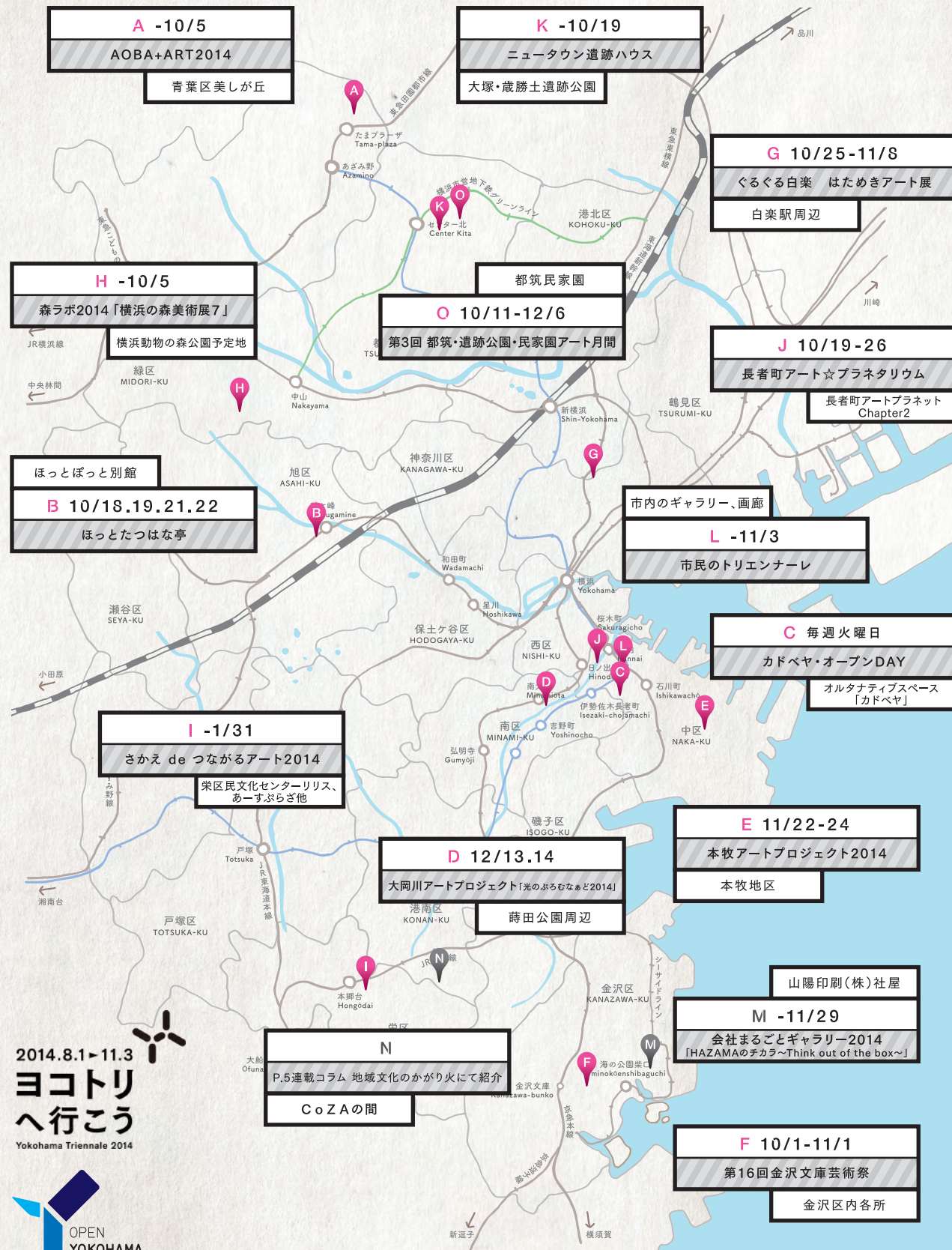


YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2014参加団体をはじめとして
10月～12月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。



2014.8.1-11.3
ヨコトリ
へ行こう
Yokohama Triennale 2014



最新情報はコチラ <http://y-artsite.org>

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイト2014参加団体
アートサイト連携事業

ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



横浜下町パラダイスまつり「ベトナム戦争後アメリカへ移民したモン族を想うお散歩ダンス(P.3)

Vol. 001

「特集 となりの多文化」



こんなすぐ近くに
あった
多文化のまち



**100年の歴史がある
この地域だから
育ててもらえた**

夏の夕間暮れ。道端にいる若い男性は、傍らにいる女性に手踊りを教えている。沖縄の物産品店の通路奥では、すでに泡盛でできあがった人たちがリズムに合わせて揺れている。沖縄の伝統芸能・エイサーの隊列が近づいてくるのだ。三線の音が途切れたら方々から「アンコール！」の声がかかる。喧騒の中で走り回っているのはチョンダラーと呼ばれる道化役だ。4メートル近い大きな旗が空に突きあげられると最後の一曲がはじま

り、沿道も巻き込みながらクライマックスの踊り・カチャーシーへとなだれ込む。

鶴見の仲通商店街で8月24日に開催された「仲通り道じゅねー」は97年に結成された鶴見エイサー潮風による企画で、今年で14回を数える。25人ほどいるメンバーの目標は「エイサーを楽しもう、楽しんでもらおう」という部分にあり、出身地域や現在の生活圏はさまざま。代表の西村政昭さんも沖縄出身者というわけではなく、テレビで活動を知って飛び込んだ。「ある年に、ふと見上げてみたら、仲通り沿いのマンションの上の階から、あるおじいさんが、お

ばあの遺影を掲げてエイサーを見てくれてたんです。ああ、やっぱりこの地域でやり続けたいなあ、と強く感じました。エイサー好きの人も沖縄出身者も多くいるこの地域だからこそ、こうしてグループが生まれ、育てていただいたんだと思っています」。

鶴見臨海部の大規模な埋立により工業化が進んだのは大正時代。その産業を支えるために沖縄からやって来た人びとが横浜に琉球文化をもたらして、およそ100年。好景気に沸く80年代後半から沖縄にルーツのある日系南米人なども鶴見に移住をしたりと、横浜市内でも屈指の多文化地域となった。

1

安心して 伝えられる場を 作る場所から

大佛次郎記念館の館長・沼尾実さんは、多文化共生の取り組みに関わってきた一人だ。

90年代当時勤務していた鶴見区の中学校の文化祭で、外国につながる子どもたちが大切にしている文化を発表する場を毎年作った。出自に悩む子どもも多かった。「まずは自分たちの守っている文化をきちんと安心して伝えられる場を作っていくのが重要だと思い、はじめたんです。伝えようとする力をつけるということ。本人が元気にならなきゃ伝えられませんからね。いろんな人との出会いの場をいっぱい作ってゆさぶりをかけて、最終的には自分自身でアイデンティティを選んでいけばいいと考えたんです」。

沼尾さんは続ける。「鶴見の文化が創造されてきたように、横浜の文化も各地から集まってきた人たちが創ってきました。開港以降に横浜に集住してきた人たちをきっかけにして、生まれていく目の前のものを見ながら横浜の文化は見直され、新しいもの・新しい文化が創造されてきたといえるでしょう」。

2

ふるさとの学校に 太い木をつくろう

地域文化をサポートするヨコハマアートサイトでは2010年に、大和市と隣接する泉区のいちょう団地地区で行われた「あいさつロード」プロジェクトを支援した。中南米など10カ国以上の人々が暮らすこの地区で使われている言葉を盛り込み、小学校の壁画をみんな



で描いた。今年の3月、児童数が減少して隣の学校と統合される直前には壁画が3枚描き足された。

企画したNPO法人多文化まちづくり工房代表・早川秀樹さんは「このまちの風景も一つの文化の要素。この地域から出て行ったらおしまいではなく、またちょっと行きたいと思ったら関わられるような形にしたいんです」。ふるさとのイメージだ。

「いちょう団地地区のベトナム料理はおいしいよねっていう話が出てきたり、自分の中にポッと来るようなものが大事です。ふわっとゆるい、だけど太い木をつくっていくとまわりの人が巻き込まれていくんです」。



3

個人史と 大文字の歴史が であうまち

市内でも外国にルーツのある市民が最も多く暮らす中区。若葉町の路上では、8月下旬、ヨコハマアートサイトが支援した横浜下町パラダイスマつりの「ベトナム戦争後アメリカへ移民したモン族を想うお散歩ダンス」が上演された(表紙写真参照)。

夏の陽光が差し込む中、映画館「シネマ・ジャック&ベティ」を出発し、観客とともに大岡川周辺を散策する。横浜に10年暮らすラオス系モン族のテン・ヴァンさん、その妻でダンサーの青山りりさんがライブ・ヒストリーを語りながら道を行く。風が吹き、モン族の衣装の飾りがちりちり鳴る。一家の話題と一族の歴史が交錯し、大岡川とメコン川が二重写しになっていった。

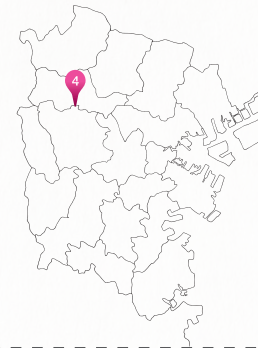
約8万人の外国人が暮らす横浜。その文化は、今日も新しくなっている。



うすかし
P.1,2 鶴見エイサー潮風「仲通り道じゆねー」
P.3上 「あいさつロード」プロジェクトで制作された壁画
P.3下 いちょう団地にある多言語で書かれた標識
P.3右 横浜下町パラダイスマつり「ベトナム戦争後アメリカへ移民したモン族を想うお散歩ダンス」

ヨコハマ
アートサイト
ラウンジ
Vol.1

アート森フォーラム



【会場】横浜動物の森公園予定地(横浜市緑区三保町885-2)【参加アーティスト】Jems Robert Koko Bi/Ingrida Vaitkiene/Kyan Bishop/Kim, JungMin/ASADA/木賀陽子/睡アンリ/八代萌【主催】GROUP創造と森の声+ヨコハマアートサイト事務局 ※森ラボ2014『横浜の森美術展7』は10月5日(日)まで。

アートサイトラウンジ
森の中で開催しました

アートと地域の関わりについて考え、交流する場・ヨコハマアートサイトラウンジ「アート森フォーラム」が8月24日に開催されました。ヨコハマアートサイトがサポートしている、GROUP創造と森の声による野外美術展の会場でもあります。

今回のテーマは、世界各国のアート事情。出演者のひとり、韓国・釜山から来日したジュンミン・キムさんからは甘川文化村の紹介がありました。階段式住居や迷路のような小道に広がる芸術作品群は、文化的再生を通じた創造的なまちづくりを目指す横浜の黄金町にそっくりでした。

日常の創造環境や自身の出自が作品に色濃く反映されており、出展される野外展への期待も膨らみます。さまざまな文化背景をもった人びとがひとつの森に集まり語り合う、豊かな時間でした。



横浜市
地域文化サポート事業
ヨコハマアートサイト

この事業は、市民やNPO団体等が主体となって地域課題へのさまざまなアプローチを行う文化芸術活動を支援することで、地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図る事業です。そのため、一年を通じて、参加者間の研修や交流に取り組んでいきます。平成26年度より、STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団で事務局を担当しています。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
(NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部内)
TEL:045-325-0410
FAX:045-325-0414
WEB: <http://y-artsite.org>
MAIL: office@y-artsite.org

@Y_Artsite

<https://www.facebook.com/yokohama.artsite>

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

発行 　ヨコハマアートサイト事務局
編集 　小川智紀・池田友実
　　　(NPO法人STスポット横浜)
デザイン 　相澤事務所
撮影 　福井裕子(表紙、P.1、2、4)
印刷・製本 　合資会社 三島印刷所

協力 　多文化まちづくり工房、
　　　鶴見エイサー潮風、沼尾実
　　　※五十音順、敬称略
発行日 　2014年9月30日



事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も、横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

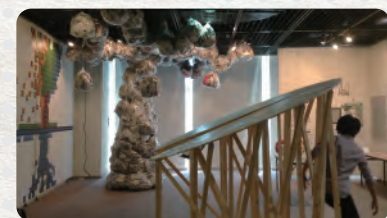
5 6月1日(日)

鶴見区生麦へ「蛇も蚊も祭」を見に行く。市の指定無形民俗文化財にもなっているお祭り、カヤで作った大きな蛇を担いで、町内を練り歩くというもの。暑いのに大人も子どもも元気。そういえば先日は鶴見神社で「鶴見の田祭り」を見た。神事というのか民俗芸能というのか。鶴見川の近くには、魚屋や釣具店が並んでいる。



7 8月7日(木)

本郷台。栄区民文化センターリスにて、さかえdeつながるアートの「ティーンズクリエイション展 2014 in よこはまさかえ」。プロクリエイターの作品と、その刺激を受けた地元中学生の作品がずらりと並んでいる。授業の課題ではなく「作品」をつくるという経験は、中学生にとってどんな時間だったのだろう。



6 7月16日(水)

市内の画廊やギャラリーをつなぐ「市民のトリエンナーレ」。関内から画廊をハシゴして、石川町まで歩いてみた。まず驚いたのは、画廊ごとに全く雰囲気が異なるということ。大きな窓があったり、ランチコンサート用のピアノが置いてあったり。美大生が描いたという、かわいらしい絵のポストカードを買った。



8 8月22日(金)

井土ヶ谷の保育園にて、第16回金沢文庫芸術祭の巨大絵画作成ワークショップ。フルーツや恐竜、ひたすら数字を書き連ねる子も。そのうちにキャンパスは自分の手足にまで拡大し、先生たちも絵の具まみれ。このお絵かきバトンは、明日は仙台へと繋がり、そうして各地を回った巨大絵画は、1ヶ月後の芸術祭で展示されるそう。



もしもし、そちらの様子はどうですか？

浜松の暮らしに
アートの風景

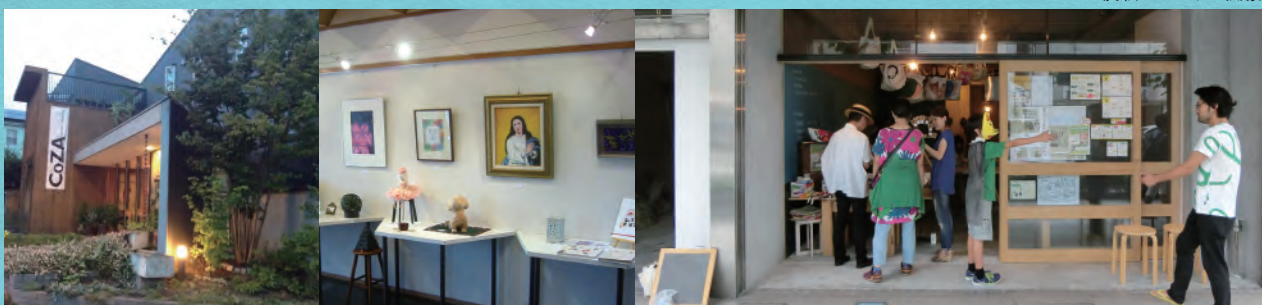
静岡県浜松市は、海、川、湖、山、平地、台地と多くの地形的特長を持っています。近年、ここでは「雑多」としかまとめられない程、様々な活動が起きています。市が創造都市推進の一環で実施している助成事業からは、自然環境・歴史・生活を背景とし、専門性に基づく様々な社会課題や各々の興味関心に取り組み活動が数多く浮き立ちました。一方、民間ならではの取り組みも多く、それらは思い切りのよさと丁寧さのバランスに長けています。

共に共通して、人に内在する創造性が(よく誤解されるような作品や発表といった形ではなく)生活の上で様々な形作り、試行錯誤を重ねています。

「雑多」ゆえの見えにくさはありませんが、浜松には「アート」と言って連想されるアーティストという特殊な才能ありきではなく、日々を暮らす人の切実さや想いに端を発する、自らの手で生活を豊かにしようという心意気があります。そんな「地域」に対して「アート」やクリエイターが介助的にならず、よい他者として関係していけるか楽しみな状況です。

鈴木一郎太(すずき いちろうた)
(株)大と小とレフ取締役
NPO法人クリエイティブサポートレッツ(2007、
2013年)にて、主に企画を担当。現在は建築家の大東
賢と立ち上げた会社で、企画から建築設計まで取り扱う。
ヨコハマアートサイト2014選考委員。

浜松のアートの風景



CoZAの間(港南区)

地域文化のかがり火 第1回

住宅街に現れる渚
CoZAの間(港南区)

港南台駅から歩いて15分ほどの住宅街にあるシャープな建物から、毎月第4土曜日にやわらかいジャズが流れてくる。集まっているのは近所の人たちやジャズファンら。約3時間にわたる親密な雰囲気ライブの休憩時間には、お客様同士が持ち寄ったお酒や食べ物を楽しみながら、自然と話の輪が広がる。

個人で運営しているこの場所は、地域の方々に展览会やコンサートなどで気軽に使っていたいというところから。象徴的なイベントが、毎年12月に開催している「十人十色展」。誰でも出品できるこの展覧会では多様な表現が共存している。それは地域の方々の多様性の縮図でもある。

公共施設の利用は、施設管理者との一対一の関係になってしまいがち。さりとて地縁組織による関係には転入者は入りにくいと感じてしまうこともある。地域のコミュニティの希薄化が懸念される中、「CoZAの間」は、地域の人と人が、気負いなく出会うことができる渚となっている。

ヨコハマアートサイト事務局